NY エッセイ 67

中瀬有紀

舞踊公演がもたらす笑顔



フォーテ氏振付の “Here....” を踊るクイーンズ・ボロー・コミュニティカレッジの学生たち

今年前期に携わった仕事の中で一つ、心が温まる照明業務がありました。それは、私がデザインを担当して今年で2年目になる、クイーンズ・ボロー・コミュニティカレッジ舞踊学部主催の舞踊公演です。昨年もとても楽しく仕事させていただきましたが、劇場の器材がすべて何世代も遡る古いライトであることと、舞踊専攻の学生が舞台監督を務める故のもどかしい進行にヤキモキした記憶が強く、今年も同公演の業務を受注した際、舞踊が求めるあかりを目指すけれども思うように再現できるかは期待できないかもしれない、と感じていました。しかし結果は、そのような私の勘をいい意味で裏切ることとなります。

約20人の学生たちが10演目ほどを発表する学年最後の舞踊公演は、ダンス・プログラム・コーディネーターであり教授のエミリー・ベリー氏率いる舞踊学部にとっての大舞台です。教授たちの振付作品、選抜された学生たちがそれぞれ振り付けた作品、またアルビン・エイリー・アメリカン・ダンス・シアターのディレクターであるロバート・バトル氏の代表作と、今年はゲスト・アーティストとして振付家のマジャーニ・フォーテ氏を招き、非常にバラエティに富んだラインナップでした。特に印象的であったのは、学生の1人が振り付けた『おかしな通勤』という作品です。エレクトリック音楽に合わせてマンハッタンの通勤を描いた約10分間の舞踊作品は、この都会独特の人々の動き方と関わり方をとてもよく表現していました。

この公演における照明デザイナーとして一番の山場は、舞台監督とのコラボレーションです。アメリカでは照明のキュー出しも舞台監督の仕事であるため、舞台監督が指定のタイミングでキュー出しをしないと照明デザインは成立しません。舞台監督業を学生に勤めさせる舞踊学部の方針により学生が公演を進行するので、照明デザイナーの私としてはその学生が私の指示どおりにキューを出してくれるかハラハラドキドキです。今年は、学生が舞台監督として成長できるために、教授たちは準備を重ねてきました。しかし、公演初日の1週間前になって舞台監督の学生から「舞台稽古に毎日出席しなければいけないとは知らなかった」と聞かされ、一同は仰天します。その学生はスマホに照明転換のメモを書き込む、いわゆる“ネクスト・ジェネレーション”でしたが、まさか「最終ドレスリハーサルだけ出席します」と言うとは予想外でした。当然の如く、舞台監督の学生を変更するとの連絡を受け、前の舞台監督と重ねてきた打ち合わせがふりだしに戻り、再度ペーパーテック（照明キューの打ち合わせ）を行ったのはすでに舞台稽古当日のことでした。

そんなこんなで、今年もやっぱり昨年と同じように後悔が残る仕事になってしまうんだろうな、と思っていたのですが、なんとその新しい舞台監督の学生の素晴らしい頑張りに救われました。彼女はその公演が初めての舞台監督経験でしたが、現場での体験をもとに気づき、考え、「どうしたらいい?」に真剣に向き合ったから、短い時間でそれまでのプロセスを必死に理解してブランクを埋めたのでしょう。「それってこうだよね」と大人がマニュアル通りの価値を学生に押し込んだら、うまくいかなかったと思います。「当校に勤めてきた9年間で一番素晴らしい公演になった」と言うベリー氏の笑顔を見て、舞踊公演というクラフトが生活の支えとなり、人を笑顔にし、誰かの役に立つのは、本当に幸せなことだと実感しました。